小林　凡石（こばやし・ぼんせき）

1、プロフィール

　俳人。本名晋(すすむ)。「北鈴」「河」「七戸俳句会」等で研鑽を積み「萬緑」の成田千空に師事。南部の風土を深く温かな眼差しで詠む。七戸町文化賞受賞。俳人協会会員。

＜生没＞
　1923(大正 12)年 3 月 18 日　～　2023(令和 5)年 3 月 22 日

＜代表作＞
　第一句集『南部郷』(平成 10 年)。第二句集『続南部郷』(平成 22 年)。

＜青森との関わり＞
　七戸町に生まれ、八戸水産中学(現・県立八戸水産高校)で学び、以後八戸市に在住。県内の様々な俳句会に出席。

2、作家解説

　先祖は会津藩士、下北半島に移った1万4千人のうちの一人である。父も祖父も教師であり、青森師範学校を受ける筈であったのが、八戸市で漁業会社をしていた義伯父の勧めで八戸水産中学へ入学。以後八戸在住。19 歳で召集され 20 歳で終戦。母方の祖父が木人(もくんど)という俳人で、小学生の時に手ほどきを受ける。その後は終戦後の数年間を渡辺水巴門の嶋守静翠居に師事。1970 年(昭和 45)年、「北鈴」に入会し本格的に俳句を始める。翌年「河」に所属して角川源義の教えを受け、1976(昭和 51)年に同人、俳人協会会員となる。1984(昭和 59)年「北鈴」終刊、1987(昭和 62)年成田千空の教室へ片道百キロの道のりを 10 年通い続ける。1988(昭和 63)年「萬緑」に入会し、千空を生涯の師と仰ぐ。千空は『南部郷』の序文にこう記す。「私も自分の句を凡石氏に問うことで、手応えを

感じ続けて来たといってよい。私にとって有難い人でもある」とその力量を認める。また、1979（昭和 54）年より生地の七戸俳句会に所属、指導的立場に。会への貢献度の高さと県内俳句大会での突出した成績により、1994（平成 6）年に七戸町文化賞を受賞した。県内最大の青森県俳句大会にて1位の県知事賞を今までに2 度、他の大会でも上位の常連であり、選者も務めている。〈地吹雪を来し口髭と眉毛かな〉〈白鳥の一雪塊として眠る〉、北国の厳しい風土を詠みながらそこには作者ならではの深い眼差しがあり、詩情がある。また〈父の日を言はず言はれず寝て了ふ〉〈金輪際口きくものか黒海鼠〉などの句に見られる飄々とした俳味も味わい深い。長年に渡り夫人と保育園を経営。〈次の日も窓に来てをり卒園児〉〈白南風や渚に放つひとクラス〉。俳号の凡石が示すように謙虚で静かな人柄。保育園に顔を出しながら、結社を超えて県内の様々な俳句会に出席し、俳句一途の生活を貫いた。〈八十路なほ燃ゆるものあり冬薔薇〉。2014（平成 26）年、「風見鶏句会」「七戸俳句会」「白山台句会」「りんごの木句会」「八戸俳諧倶楽部」「RAB俳句教室」等の句会に所属。

2023（令和 5）年 3 月 22 日、八戸市内の病院で死去。享年 100。